

西田貞夫さん (甲賀町)



歴史を学び、今の暮らしへ

父は私が二歳の時に戦死しました。当時の大原村では戦禍がなく、私は戦争の怖さを体験していませんが、家族を亡くした当時の祖父母や母の気持ちを思うと今も心が痛みます。戦後、父がいなくて我が家は大変苦勞し、母が一生懸命働いて一家を支えてくれたことが今も記憶に残っています。戦中や戦後の苦勞話は折りに触れ

て家族に話します。特に子や孫には、「英霊を守って欲しい」ということを切に伝えたいと思います。それは、犠牲となった尊い命が礎となって平和と繁栄、そして我が家の幸せがあることを知ってほしいからです。戦後70年、私たちは戦争のない豊かな社会で暮らしていますが、それは多くの人の支え合いによって築かれてきたことを忘れてはなりません。

鹿兒島の知覧特攻平和記念館へ行ったとき、二十歳に満たない特攻兵の遺品が今を生きる私たちに平和の意味を伝えてくれました。歴史の事実を正しく学び、戦争の悲惨さ愚かさ、命の尊さや尊厳を伝えていくこと、それが今を生きる私たちの使命かもしれません。笑顔で健康に過ごせる平和な社会が永久に継承されてほしいものです。

甲賀市戦没者追悼式を8月26日、あいづつか市民ホールで開催しました。遺族や関係者など263人が列席し、亡くなられた方々に追悼の誠を捧げるとともに恒久平和への誓いを新たにしました。式典では中嶋市長が追悼のことばを述べ、参加者は平和への祈りを込めて戦没者の御霊に献花を行いました。

戦後70年の節目に、遺族会の方に戦争や平和についてお話を伺いました。

70年目の夏 平和への思いを新たに



▲追悼式で追悼のことばを述べる中嶋市長

先の大戦においては、戦場に倒れ、あるいは空襲や原爆投下などにより310万余人の命が奪われました。今、私たちが享受している平和は、これらの尊い犠牲の上に築かれたものであり、平和への祈りと不戦への誓いとともに、戦後70年という歳月におけるたゆみない歩みが、平和国家の実現に結び付いたものと確信しています。

そして今日までの歴史を顧みるとき、戦中・戦後を生き抜いてこられた人々の一途な苦勞が、豊かな国を築いたのだということも忘れてはなりません。

本市は、合併10年を経過し、市民の皆様の努力により県下に誇りうる

住みやすい街として発展を遂げてまいりました。しかし、戦争を知らない世代が8割を超え戦争の記憶も風化しつつあります。私たちは、過去の戦争の歴史に謙虚に向き合いながら、祖先や家族を想い、郷土に誇りを持ち、今日を生きる喜びを伝えていくことを使命としなければなりません。ご英霊のご冥福を心よりお祈りし、戦争とは無益なものであり、過ちを繰り返さない強い決意とともに、本市に住む全ての人々が、安心して幸せに満ちあふれた「理想郷・甲賀」を築き上げていくことをお誓い申し上げます。

(中嶋市長の追悼のことばより)

遺族会員

松本秀一さん (甲南町)



戦前から、戦中戦後を生きて

私は昭和7年に生まれ、祖父母と父母、4人の妹、住み込みの店員さんたちと暮らしていました。昭和16年7月に突然父が陸軍に召集されました。開戦直前で諜報活動が活発だったため、父の出征は大勢の人に万歳で見送られる派手なものではなく、内々でひっそりと行われ、子どもながらに納得がいかず悔しい思い

をしたのを覚えています。

やがて店員さんも次々と出征され、間もなく祖父母が他界し、母子だけの大変厳しい生活が始まりました。戦局が次第に悪化する中、店員さんが相次いで戦死され、最後に私の父も戦死したとの公報が届き、残された私たちは絶望の淵に立たされました。その後家族は一生懸命努力し、何とか幸せを掴むことができましたが、母が84歳で亡くなった

甲賀市遺族会 伴資男会長



伝えることの使命

市遺族会事業に、心温まる対応をしていただき感謝しています。しかし、配偶者や遺児の高齢化と戦争に対する意識が薄れてきていることを背景に、追悼式への参列者は年を重ねるごとに少なくなっており、遺族会にとって大きな課題となっています。

遺族は戦争の悲惨さや平和の大切さを後世に伝えていく使命をもっています。私たちのような遺児をつくらないためにも、私たちの記憶や体験を風化させることなく、平和への思いを次世代に継承していかなければなりません。そのためには、英霊の孫やひ孫のような若い世代にも、遺族会に参加していただけるような取り組みを進めることが大切だと思います。

恒久平和のために遺族会としてできることは何かを、しっかりと考えていきたいと思います。

時、夫と別れたままの人生は一体何であったのかと、どこへもやり場のない怒りや悲しみを覚えました。

戦後70年は年月の区切りですが、家族を戦争で亡くして大変な思いをした遺族の悲しみや口惜しさは何年経っても変わることはありません。戦争を繰り返してはならないということに次代にしっかりと引き継ぐことが大事だと考えています。